

長谷川慶太郎著「破綻する中国、繁栄する日本」実業之日本社、2014 年 2 月 10 日刊を読む

専門知識を身に付けてから就職へ

1. (1) 厳しい国際競争に打ち勝っていくためには、日本でも労働力の質を向上させないといけないわけです。
(2) 今、大学生の就職率が 70 % に上がったといわれています。
(3) 本当のところ、全体に対しての就職率は 50 % に止まっています。
(4) 就職をしたいと思っている学生のうち、就職したのが 70 % というわけです。
(5) 卒業生全体の数からいうと 50 % となり、残りの 50 % は就職出来なかったのです。
2. (1) 国立理工系の卒業生のうち半分は大学院に行きます。
(2) ただ 4 年生を卒業しただけでは専門家として企業は雇いません。
(3) 使い物にならないのです。
(4) 大学院のマスターまでやらないと専門家として認めてもらえません。
3. (1) マスターまでやると専門的な知識は一応、身につけていますから専門家として扱うことが出来るわけです。
(2) そういう発想なのです。
(3) 一人前になってから雇うぞ、という事です。
(4) 日本企業もこの点厳しくなり、役に立たない学生を雇用して、ただ飯を食わせる余裕はないわけです。
(5) 昔はまだ、ゆとりがあったので、雇うことが出来ました。
(6) こうしたことを知っている学生はマスターの称号を取るために大学院へ行くことを希望するわけです。
(7) だから、表面的には学生の就職率は高いようですが、実態は違い、厳しい就職戦線が続いているのです。

P197

[コメント]

医歯薬系・理工系だけでなく福祉・介護・サービス系も含め、大学の 4 年間だけでは勉強が足りず、大学院や専門学校への進学が一般化している。その理由は、現代的な課題の解決を社会的使命 (mission) とする企業は「高学力」の人材を希望するからだ。そのことを長谷川慶太郎先生が本書でもわかりやすく解説してくださっている。参考になる。

— 2014 年 1 月 22 日 林 明夫記 —